

BOOK
REVIEW

面倒みるのが大変なのはヒトも魚も同じ

『水族館飼育員のキッカイな日常』 20a 新ゴM (以下同)

なんかの菌 著

全国に、いや世界中に水族館はある。それぞれ特徴があり、書評子はどこも好きである。手術室で準備や後片付けを見ているためか、水族館も展示された水槽の正面だけでなく、その裏方の仕事に気がなっている。類書はほかにもあるが、ちょっとふざけた4コマ漫画の本を手にとってみた。だいたい、ペンネームがふざけている。しかし著者の仕事ぶりは極めて真面目で、飼育されている魚たちを深く愛している。新入職員として水族館に採用されて経験した奇怪な出来事が漫画で面白おかしく紹介され、添えられた解説で水族館愛が語られている。

著者が何度も述べているように、水族館の飼育員といえば誰もが真っ先に思い浮かべるのはイルカショーの明るいお兄さんお姉さんだが、あの仕事はごく一部でしかない。人目につかない陰で汗を流す飼育員らのおかげで、魚たちは元気だし、私たちは水族館を楽しむことができる。具体的には、餌の準備や水槽の掃除などの仕事ぶりが細かく紹介されていて、ぐいぐいと引き込まれる。与える餌は飼育員の食事よりも「いいもの」なので、包丁で刻んでいると「醤油はどこ？」と思ってしまうなど、愉快な話が盛り沢山である。

魚たちの体調や水槽の具合によっては残業や泊まりになってでも仕事に邁進する飼育員らは、緊急手術で夜も仕事する麻酔科医と、ちょっと似ている。それに、飼育つまり臨床業務だけでなく多忙なのに、合間を縫って研究にも取り組んでいること、ますます親近感がわくし応援したくなる。私たちと違うのは、餌やり

体験やバックヤードツアーや企画展だろうか。魚たちに向き合うだけではなく、来館者に学んでもらう仕事である。

昔からある「オタク」という呼称は、その狭い道を追求するあまりほかのことに無頓着な者に対し、ちょっと変わった暗い人といった意味合いで使うことが多い。ところが近年の「推し」には、よろしくない印象は含まれず、どちらかといえば明るい。オタクも推しも、他人に迷惑をかけなければ、夢中になれる楽しさと喜びに溢れ、しかも食うには何とか食べているわけで、恵まれたことである。水族館の飼育員には、魚オタクが多いらしい。いい職場である。麻酔科医控室にも、麻酔オタクがたむろしているだろう。当然である。麻酔にも、のめり込むだけの深遠さと難しさがある。この著者のように4コマ漫画が描ける技量があれば「麻酔科医のキッカイな日常」も本になるだろう。飼育員が魚の命を預かるように、麻酔科医は患者の命を預かっている。

書評子は20年ほどメダカを飼っている。メダカは強いので素人でも続けられているが、水族館の巨大な水槽をいくつも維持する大変さは、想像を絶する。水

槽管理はプロの飼育員にならできるし、麻酔はプロの麻酔科医にならできる。当たり前である。

イルカやアシカのような哺乳類だけでなく、魚も個体ごとに性格が違うことに、著者は気づいた。これは書評子も強うなずく。個性があるのはヒトだけではない。どんな生き物も、図鑑に記載の「おとなしい」「気性が荒い」といったおおまかな傾向はあるが、個体ごとに随分と違う。猫や犬を飼っていれば、性格の個体差は身近だろう。イチョウの新芽や落葉にも早いや遅いのがいる。池のカモも、春になってすぐに旅立つのもいれば、だんだん残っているものもいる。個性は、その種が一気に全滅しないように、神様が多様性を仕込んだためではないだろう。

この拙評を書き終えようという頃、書店で本書の続編『水族館飼育員のただならぬ裏側案内』（集英社インターナショナル）を見つけた。なぜか出版社は違うのだが、構成は同じ4コマ漫画と解説で、装丁も似ている。著者の勢いは衰えておらず、こちらも面白かった。併せて楽しんでいただきたい。水族館に行く予定があれば、本書を楽しんでから行くと楽しみは倍増するだろう。行く予定がなくとも、読めば行きたくなるだろう。水族館は、子どもや孫と一緒にでなくとも、大人だけでも楽しめる。しかも季節を問わない。ぜひ。

水谷 光 (市立貝塚病院 麻酔科・中央材料室)

死体は雄弁に語る。
しかも嘘をつかない。

『町内会死者蘇生事件』

五条 紀夫 著

何とも風変わりな、人を食べた推理小説(ミステリ)である。だいたいタイトルからして意表を突いている。そもそもミステリーあるいは古風に探偵小説と呼ぶほうが似つかないかもしれない。には、やたらと殺人事件が多いのである(そういえば「死体が多すぎる」というタイトルの作品もあった)。そこで逆手をとって、「蘇生事件」ときた。

物語の設定では、信津町にはその町名の由来となった信津寺という古刹があり、その住職である権造は長きにわたって町会長であって、どこぞの大統領には及ばずながらも、町の権力者であるがゆえのパワハラ、モラハラ、セクハラのし放題という「イヤなジジイ」である。そこで主人公の健康が、町を明るくするという使命感により、友人である昇太、由佳里と語らって権造を殺したのである。寺で開催された飲み会で最後まで飲み続けている権造と雑用係の健康、昇太、それにお酌係の由佳里が残っているから状況は整った。酔いつぶれた権造を風呂に入れて頭を洗め、事故死ないし病死を装った殺人である。

ところが翌朝の寺の境内での小学生たちのラジオ体操の時間に、権造が元気に姿を現したのである。驚きながらも調べてみると、どうやら信津寺には死者を蘇らせる秘術が伝わっているらしい。しかし権造本人は死んでいたのだから、自身自身に秘術を使うことはできないので、誰か別の者が蘇生させたに違いない。で、その「蘇生犯」を探そうというのである。さらに、なぜ権造を蘇生させる必要があったのかという動機も問題となる。冗談

のようでないが、きちんとミステリの骨格を維持しているのだ。

犯人側から描いたミステリを倒叙ミステリというが、本書はまず第一章の見出しで「倒叙ミステリにはならない」とあり、最初に読者の予想をひっくり返している。死者を蘇らせるなどは現実にはありえない話だが、何かまうものか、本格派と呼ばれるミステリはだいたいありえそうもない設定でヒトが殺されているのだ。密室の中とか、雪に閉ざされた山荘だとか、要するに一見不可能あるいは不可解な事件になんとか辻褄のあう説明をつけて、いかに読者を納得させられるか、という作者と読者のゲームなのである。ご丁寧なことに、第三章の見出しは「現実的な話ではない」である。

ミステリの始まりはエドガー・アラン・ポーが1841年に発表した『モルグ街の殺人』というのが定説である。天才探偵と凡人の聞き手(語り手)の組み合わせ、不可能犯罪や意外な犯人、最後の推理の開示など、後のミステリの原型はここに表れているのだが、200年近くにわたり世界中の才人俊英が知恵をしばって創作した結果、もはやアイデアは出尽くした



新潮文庫 NEX
2025 年
670 円 + 税

と多くの人が考えている。密室ジャンルにはもう新しいものはないし、意外な犯人のジャンルでも、被害者が犯人、探偵が犯人、さらに作者が犯人という作品まで登場するに至り、もはや残されたのは「読者が犯人」しかないと言われて久しい(しかし果敢なチャレンジャーはいる)。

蘇生の秘術をもっともらしく思わせるために、作者は地元意識、地元民といういかにもそこかしこでありそうな閉鎖的な環境を設定している(『八つ墓村』かね?)。犯人三人の友人である克己は「団地の子」であって、町にとって異物であるとの認識がお互いにあり、克己は蘇生犯探しのゲームも途中で降りている。また作者は、健康の母に「団地の子と遊ぶのはよしなさい」とか「よそ者は何をするかかわらないから」とか「あなた(健康)はこの町で生きてゆくのだ」といった発言をさせている。犯人三人はいずれも地元の子であって、信津で生まれ、育ち、働き、子を育て、そして死ぬことが(ほぼ義務的に)定められ、しかもそれに納得している若者たちなのである。その条件設定がこの馬鹿馬鹿しい犯罪と秘術をもっともらしく見せているのだ。

なお著者には「殺人事件に巻き込まれて走っている場合ではないメロス」というパロディ小説もある。これはユーモアミステリというのだろうか、面白さでは確実に本作の上を行っている。「走れメロス」は、読んだことがなくてもほとんどの日本人が名前くらいは知っている(しかも作者の名前もまず知っている)有名な小説であるが、やはり「走っている場合ではない」を読むなら、「走れ」のほうを先に読んでおくこと断然面白みが増す。ついでに太宰(あ、作者の名前を言ってしまった)の人物史を知っていると、さらにニヤリとすること間違いない。

福家 伸夫 (帝京大学ちば総合医療センター)

BOOK REVIEW

流用

戦後80年⑤ 軍隊の日常性

80% + スミ20%

15% 新刊

『桜島・狂い風』『日の果て・幻花』兵隊小説集I・II

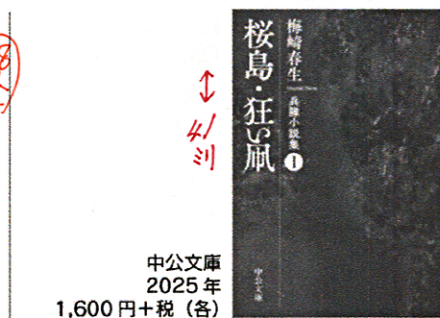
梅崎 春生 著

戦後を代表する作家の一人、梅崎 春生 (1915～1965) の兵隊小説集が分厚い文庫版I・IIとして刊行された。著者の小説ワールドを堪能するのに十分だ。『桜島』『日の果て』『幻花』『狂い風』などの代表作をはじめ、IとII合わせて26作、いずれもつぶぞろいの力作が網羅されている。一貫してテーマは軍隊の日常だが、題材は豊富で作家の底力を感じる。

Iにはほかに『桜島』をめぐるエピソード、IIには梅崎と阿川 弘之との対談「戦争文学をどう読むか」が収録されている。梅崎の執筆姿勢をうかがう参考になる。

改めて言うまでもないが、軍隊では鉄の規律が幅を利かす。上官の命令は絶対であり、年上への配慮や礼儀などどこ吹く風、いじめ、しごきが問答無用でまかり通る。そこでは人間性という尺度は意味をもたない。すべての作品で特に輝きを見せるのは、この理不尽な状況に置かれた兵隊たちの複雑に揺れ動く意識、心理・心情、情動であり、著者の真骨頂はとりわけそうした内面の描写力、表現力にある。史実書やドキュメントなどの客観的記録と違って、その筆力を咀嚼するように味わうことに梅崎を読む喜びがある。

戦後まもなく著者を一躍有名にした『桜島』。きつと何度読んでも鮮烈な印象は薄れることはない。通信士の主人公は突如転勤命令を受け、のんびりとしたそれまでの日常が一変、常に死の影がつきまとう地に赴くことになる。着任前日の一夜の女に感じた生のぬくもり。対比的にまさに軍人の典型である上官に対する嫌悪と死への不安は消えることがない。日々の屈辱的な仕事に苛まれながら、「私



は、何の為に生きて来たのだろうか」と無意味にも自問する。終戦の御詔勅の放送のわずか前、親しくなった兵は無慈悲にも敵機襲来で命を失い、彼はかろうじて生き残る。最後は圧巻だ。梅崎が描くのは、主人公のとめどなくこみ上げる涙や嗚咽ばかりである。それが彼に執拗につきまとった死の恐怖からの開放感を強烈に伝えている。

軍隊では、不格好、のろま、不器用がいじめ、蔑みの格好の材料になる。梅崎はそれを阿川との対談で「軍隊の日常性」と語っている。『万吉』『蟹』では、その陰湿さが露骨に描かれる。『帽子』『眼鏡』は、本来はお笑いものなのだが、わずかの不注意が規則に反していると鉄拳制裁が容赦なく待ち受けている。残酷な運命に焦点を合わせたのは『無名颯風』だ。復員兵として故郷に戻るある老兵は、その途中で台風に襲われ、倒壊した家の犠牲になる。『崖』は物語として面白みが加味された一風変わった作品である。確信犯的に軍の規律に抗う一人の老兵。“私”にはその頑ななふまいが理解不能。サスペンスタッチでスリリングな作品に仕上がっている（この作もそうだが、崖から落ちそうになったり、落ちたりする場面がしばしば出てくる）。

以上はIの作品群からいくつか。おおかた梅崎自身の体験をもとにしている。IIの作品群は、だいたい他者から聞いた話をもとに構想力を存分に発揮させたもの。冒頭の『日の果て』は、脱走兵の射殺の命令を受けた兵の“迷える子羊”の物語だ。命令を断行するか否か、ためらいや苦悩が全体を貫く。揺れ動く心情が切々と伝わってくる。結末の悲劇がいたわしい。『B島風物誌』は飢餓、餓死がテーマだ。食べ物をめぐる醜悪なエゴの争いが痛々しい。戦後まもなく、かつての赴任地や故郷を訪ねる。しかし郷愁はなく、むしろよそ者として弾き飛ばされる自分を痛感するばかり。IIの最後の三作の『故郷の客』『大夕焼』『幻花』は、そんな心境を描いている。

戦後直後を舞台にした作品において梅崎がテーマとしたこと、それは自己アイデンティティの喪失か。戦いが終わり、軍務を解かれて数日後の“私”の内的モノローグ。「何故だろう。戦争から解放されて、今はすっかり自由になったというのに、私のこの感じは一体何だろう？」（『無名颯風』）。身の置き所のない焦燥感、虚脱感。急ぎ立てられる内的衝動が、力感に富んだ文体で明瞭に表現される。

一人の英雄も登場しない。格好の悪いやつばかりだ。明るい結末は一つとしてなく、後味は苦い。それにしても、どうして戦後文学を読むのか。子どもの頃には楠木正成を題材にした軍記物や、“加藤隼戦闘隊”の活躍の物語にしばしば接した。日本人の鏡というわけだ。漫画家の故水木しげる氏は、＜兵士たちのみじめで無残な「死にざま」を描いても読まれない、売れないからだ、本当はそこを書きたかった＞というようなことを述べている。この心底の願いに小説として応えているのが、梅崎の兵隊小説集だ。陸海軍の独特の体質やそれに起因する死、そして小説だけに精神の荒廃の実像を見事に描ききっている。

127

関本 英太郎

127